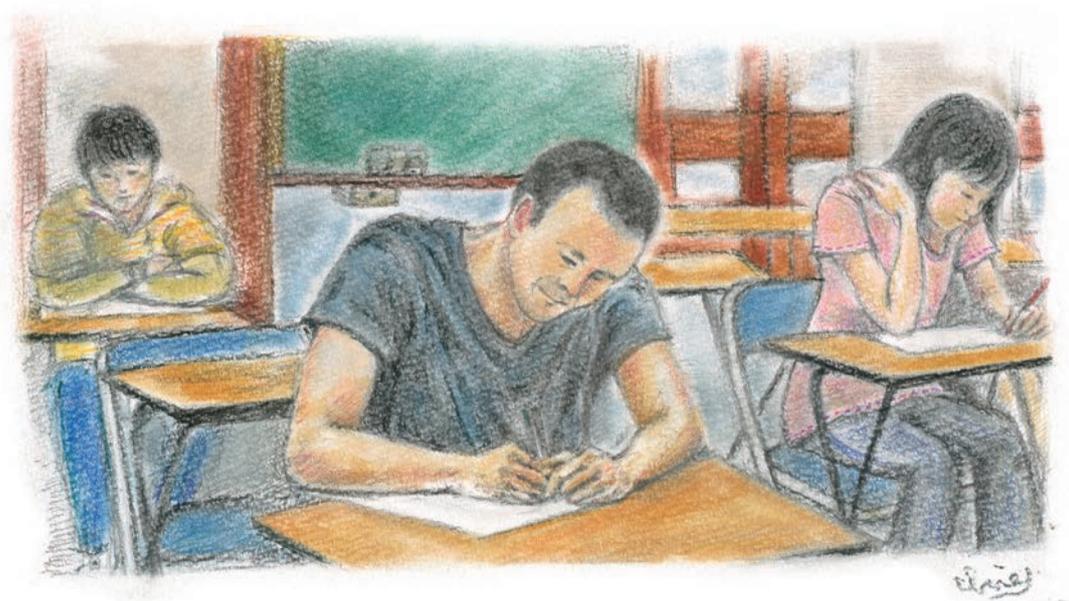


30年遅れの高校生



30年遅れの高校生

20XX年3月X日・・・卒業式

あきは胸を張って高校を卒業していった。

おめでとう、あきら！

実はあきはもう50歳も近い、自称

「おっさん高校生」だ。

今日までの人生を思い起こせば、本当に今日の自分が嘘のよう。

西宮で生まれ、西宮の小学校・中学校出身のあきは、30年遅れで西宮の高校生となり、ついに今日、待ちに待った卒業の日を迎えた。何歳になっても、今からの自分の未来にわくわくできるっていいなあ。



中学生時代のあきら

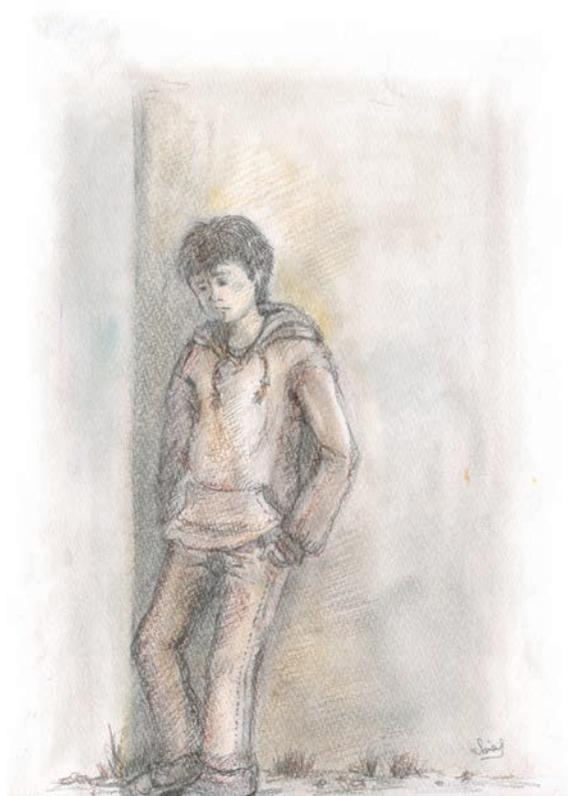
小学校時代、たいへん複雑な家庭環境の中で育ったあきら。

だんだん悪いことも覚えて、不良少年という表現がそのまま当てはまる中学生時代。

2年担任の名村先生は学校から足が遠のきつつあったあきらを、毎日のように迎えに来てくれていたけれど、あきは逃げてばかりいた。やがて夜遊びがたり、昼夜逆転の生活に。

いつのまにか学校が遠い場所になってしまった。

あきはいまさら言いたくないようなつまらぬ悪さばかりを繰り返していた。



中3も後半になるとやはり俺も高校に行けたら・・・と思うようになった。でも時すでに遅かった。中学に入って付いた学力なんかあきらにはほとんどない。それでも進路指導の牧原先生は相談に乗ってくれた。

しかし受かりそうな高校などなかなか見つからず、無理やり受けた高校は当然のように不合格。定員を満たしてなかった近くの町の定時制高校再募集試験でようやく高校生の切符を手に入れた。



深くて暗いよどみに

そんな時のあきらに順風なんか吹かない。入学早々から新入生同士のけんかを繰り返すうちに、もう学校が嫌になって、5月以降は学校に足を向けることさえなくなってしまった。中学の時以上の、夜遊びと悪さの日々がやってきた。心配してくれていた中学校の先生も「あいつどこで何やってんだ?!」と途方に暮れるしかない。いつの間にかあきは深くて暗いよどみに落ち込んでいった。

20歳になった。悪いことを覚えながらもお金儲けもうのことに興味が無いわけでもなかった。

友人たちと共同で商売を始めた。それが結構うまくいったのがこの頃だった。世はまさにバブルの時代だったのだが、若いあきらにはただ金の回りがよいことに有頂天うちょうてんになればよかった。

30歳になった。人生に波は来るものだ。友人たちとの関係がぎくしゃくし、今度は大きな借金を抱えることになった。仕事にはあれもこれも手を出してみるが、うまくいかない。人との関係もうまく作れない。「転職ですか? 30回は越えてると思います」とあきら。支離滅裂しりめつれつで破滅はめつてき的な毎日・・・そんな日々だった。不眠、過呼吸、うつ病、パニック症候群、ギャンブル依存症・・・精神科のお医者さんには何人もお世話になった。生きていくのが嫌になる自分がいた。

本当の自分

41歳で発達障害と診断された。よく似た体験を持つ同級生との久しぶりの出会いがきっかけだった。その友人はすでに発達障害との診断を受けていた。あきらも思い切って大学病院の専門の先生を訪ねた。自閉症スペクトラム障害・ADHDだと言われた。聞いた時は大きなショックだった。その一方でずっと生きづかった自分の過去によく真正面から向き合うことができた。隠さずに本音を言えば、自分のことがきちんとわかって、少しほっとした。



これが大きな転機となった。ちゃんと自分のことがわかるってすごいことだな、そう思うようになった。それなら、これからどうしようって、考えられるようになったのだ。もういい年になったのだが、少しずつ進みたい道が見えてくるのはあきらにとって不思議な感覚だった。

世の中には、自分の比ではない様々な障害のある人たちも多くいる。負のかたまりのような苦しかった自分の過去をこれから活かすことはできないか、今からは支援する側になりたい、そう強く思うようになった。精神保健福祉士になりたい・・・これまで思ってもみなかったことをあきは考えるようになっていた。資格を取るなら、今のオレにしているのはまず高卒資格だ、そう思ったあきは行動を開始した。

中学時代の恩師との繋がりと励まし

前向きに考え始めると、なにかは変わるものだ。あきらかに順風が吹いてきた。

まず思い出したのは中2の時の担任の名村先生だ。先生の今の勤務先を知っていたので訪ねてみることにした。卒業して25年以上も経っているのに、あれだけ迷惑かけたオレの相談に乗ってくれるだろうか・・・「先生、おれ今からでも行ける高校あるかな?」「西宮緑風高校を受験してみてはどうだ。」名村先生は何十年経っても優しくかった。こんな年になった今のオレの不安にも付き添ってくれた。それに、あきらが長いこと学校という世界と切り離されたままだった間に、じつは学校の方もいろいろな変化が起きていた。一言でいうと、「やり直しができる高校」「多様な生き方に寄り添える高校」ができていたのである。

しかし受験準備にかかろうと書類一式を手にしたあきは当惑した。どこに何を書けばいいのやら、ここには一体何を書いたらいいのやら・・・さっぱり見当もつかない。追い風がまた吹いた。この頃生活を立て直そうと始めていたジョギングだが、なんとそのジョギングコースで出会ったのが中三の時の進路指導の牧原先生である。お年を取られた牧原先生は、健康のためジョギングを日課とされていたのだった。悩みを打ち明けたら早速「明日、〇〇中へおいで、書き方教えてあげるから。」あったかいなあ、牧原先生・・・おかげであきは受験の書類を無事に書き終えることができた。あとは中学校の卒業証明書を手に入れるだけだ。

吹き始めた追い風は止まらない。何しろ、あきらの年齢である。卒業証明書は母校に行って自分でもらってこなければならない。校長先生に発行をお願いするらしい。今の校長先生を調べたら、なんと自分が中学生の時から知っている高井先生が校長先生をされているではないか。うれしくなって電話をすると「おいでおいで、いつでもどうぞ。」、駆け付けると校長室に通してもらい、思いっきり今の決意をほめてくれてあきらのエンジンに火が点いた。その時、高井校長先生から励みにともらった小さなイルカの置物は今でもあきらを励まし続けている。

あきは晴れて30年遅れの高校生になった。
しかし、追い風がずっと吹き続けることなんてない。
高校入学後の新たな試練が始まった。
今からの4年間、あきらにはどんな出会いがあるのだろう。



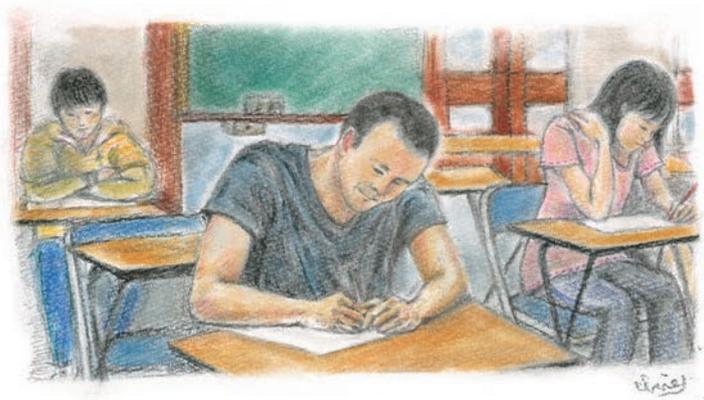
おっさん高校生の誕生だ！

決意だけは一人前だったが、実際に来る日も来る日も学校に通う自分なんてもう何十年もしたことがない。特に最初のひと月は、学校帰りに夜空の星を見上げる余裕もないくらいに疲れた。何とか今日も学校に足が向くよう自分を奮^{ふる}い立たせた。それでもやはり思わずサボってしまう日も増えてきた。そんなあきらにやきもきしていたのは担任で体育受け持ちの吉井先生だった。あきらはある日思い切って言った。「先生、思っていることを言ってください、オレを教育してください！」「覚悟を決めて高校に入られたのでしょうか。それなら人生をかけて授業を受けに来てください。」・・・のちにあきは書いている。「私よりも年下の吉井先生だが、力強いその言葉は、胸に響いた」と。あきはこの日の言葉で吹っ切れた。学校指定の体操服を着て体育の出席率を上げようと頑張るおっさん高校生の誕生だ！



1年の夏休みの前に白石先生からかけてもらった言葉もあきらを支えた。学校の勉強ということから長らく縁が切れていたあきらには、まるでちんぷんかんぷんの教科もあった。特に苦手なのが語学系の科目だ。国語の白石先生は、夏休み中でも勉強したい人がいたら職員室においてと生徒に呼びかけた。「おっさん高校生でも相手してくれるだろうか？」と思っていたが杞憂^{きゆう}だった。苦手中の苦手、国語の文法をていねいに教えてくれた。一度行けば2時間近く、結局3度も行った。そんな行動をとる自分にも驚いた。2学期に向かってやる気満々になれたあきらだった。

2年になった。特別支援学校から転任してきた青田先生があきらの担任となった。あきは、自分の障害のことにも詳しく理解が深い青田先生にずいぶん助けられた。自分の障害のことを知っているとやはり安心感が違う。青田先生の教科は日本史だ。先生の楽しい授業はヤル気が出る。人生で初めて100点が取れた。青田先生に2年続けて担任をしてもらったことがあきらには一番の追い風だったのかもしれない。また生物の山崎先生にも勉強の面白さを教わった。授業プリントの最後には、感想・質問とともに自分の理解度判定の記入欄があり、先生とのやり取りが毎回楽しみになった。おかげで生物でも90点が取れた。授業を通じて先生に思いを出せるなど、この年になって初めての体験だった。勉強するってホントは楽しいんだ。



4年次の担任川原先生は聴覚障害のある先生だ。さらに別の大きな病気とも闘いながら、日々教壇^{きょうだん}に立ち、来る日も来る日も休まず職務をこなしている。そんな川原先生の姿に接し、あきらめはそれまで味わったことのない感情と出会うことになった。教育者としてだけでなく、人生の大先輩である先生の生きる姿勢に尊敬の念が湧いた。仕事を全^まうするとはこういうことなのだという無言の教えがあった。大人としての姿を学ばせてもらった。「教育は人なり」というが、この年齢で高校教育を受けられたからこそその実感かもしれない。

みんなの優しさにあいさつ

一緒に高校で過ごしてきた同級生の人たち、あきらからすれば「ともだち」なんていう言い方じたいが恥ずかしいのだが、実はたくさんの「ありがとう」がちりばめられている。

体育の時間やホームルーム、それに学校行事……

こんな時には生徒どうしでのグループ分けがあるが、おっさん高校生のあきらは、ドキドキだった。

誰がオレと組んでくれるんやろ？ そんな子いるのかな？ いたんです、いつも組んでくれたAさん、ありがとう。

今となっては、挨拶をしあつた^{あいさつ}くらいのBさんのこともよく思い出す。うれしかったんだなあ、オレ。そっとペンを貸してくれたCさん、きっと一生忘れない。あなた方の存在^{きづか}や気遣いで、このいいトシした高校生がどれだけ救われたことか。

改めて言います。

ほんとうにありがとう。



終わりに

30年遅れの高校生だからこそ、心の底からそう思うことがある。

たくさんの先生にお世話になりました。

たくさんの先生に教えられました。

そして、いっしょに学んだ、今の若い子たちにも助けられました。

よくわかりました。

気が付くって、大事だ。

一步を踏み出すのに、遅いなんてない。

助けてくれる人はいるものです。

支えてくれる人には巡り合うものです。

あきら、48歳でこの度高校を卒業しました。

ぜんぜん遅くない！

今から夢に向かいます。

第2次西宮市人権教育・啓発に関する基本計画

西宮では、一人ひとりの「人権（じんけん）」が尊重されるまちをめざすため、令和元年から10年間の人権教育・啓発についての計画をつくりました。

この計画では、

- ◇一人ひとりの『自己肯定感』を高める～子供も大人も、みんな「大切な存在」～
- ◇一人ひとりが『多様性』を認め合う～みんなちがってあたりまえ～

これらの「2つのキーワード」を「一番大切にしたいこと」として、これらの視点を踏まえた取組みを進めていきます。

人権文化の花咲くまち 西宮をめざして 22

令和3年（2021年）3月発行

西宮市・西宮市教育委員会

文：白井 弘一

画：米光 智恵



ブルーローズ
「～夢かなう～」

※作中の名前等は全て仮名です。



令和3年（2021年）3月発行

編集：西宮市

〒662-8567 西宮市六湛寺町10番3号 ☎(0798)35-3320